

特別講演 1 最近の画像診断技術の進歩に伴う関節運動学

12月15日(土) 15:10-16:10

会場：第1会場 テルサホール

大阪大学運動器バイオマテリアル寄附講座 菅本一臣

司会 蘇生会総合病院 麻田博之

リハビリテーションにおける理学療法や作業療法の基本となる訓練に関節可動域訓練と筋力増強訓練がある。関節可動域訓練ではその手技の良否は可動域を獲得するうえで非常に重要な要素である。それを身に着けるためには、基本となる骨関節の3次元動的動きを十分に理解することではないかと考えている。しかし骨関節の3次元動的動きは生きた人間では皮膚におおわれているために直接観察することができない。例えば肩関節の動きの際には肩甲骨は皮膚の下を大きく滑動している。それを直接観ることができないことが肩のリハビリは難しいといった俗説が広まる一つの理由となっていると思われる。関節の動きを知ってリハビリの手技を高めるという目的の重要性を、関節の動きを少しでも体感していただくことで認識していただきたいと思っているが、これまでは生きている人間における骨関節動態を明らかにする方法が確立されていなかった。我々は現在までに独自の解析システムを確立したが、それらを用いて正常例や様々な病態下での関節動態を解析してきた結果、生体内での関節動態は屍体を用いた研究から導き出された多くの結果と異なる一方で、骨形態は個人間により様々であるにもかかわらず、規則性のある動態が存在することが明らかとなった。この概念はリハビリテーションの方法を大きく変えうる可能性のあるものと考えている。感と経験に基づく治療体系を科学的根拠のもとに確認することが今後重要と思われる。